（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　山口　誠

本論文は、1925（大正 14）年に開始された日本のラジオ放送事業とその社会的受容を対象に、「放送」というコミュニケーション様式が近代日本において成立する過程を、①放送局の活動、②それを「聞く」オーディエンスの身体、③「放送」を可能にするメディア技術という 3 つの要素からなる重層的過程として綿密に捉えた全 3 部、16 章の労作である。

序章で著者は、ウォルター J. オングによる「二次的オラリティ」の概念を基礎に、「放送」という二次的オラリティの構成次元を、表現層、形式層、技術層という３つに分ける。その上で、これらと緩やかに対応して、①「声」の生成過程としての放送局の実践、②「耳」の生成過程としての「聞く」ふるまい、③両者を繋げる回路としてのラジオ受信機の変容という３つの社会過程・行為について、歴史の具体的文脈のなかで検討していこうとする。

第Ⅰ部では、放送される「声」を「聞く」という関係行為が生成されてくる過程が、当時、放送局が抱いていた「放送」概念の分析（第 1 章）や、受信機の技術的変容（第 3 章）とその標準化プロセス（第 4 章）の分析を通じて明らかにされる。また第 2 章では、1920‐30 年代の日本で、放送を「聞くこと」と「聞かないこと」がいかに社会的に意味づけられていたかを、社会調査や雑誌への寄稿など様々な一次資料の分析から描き出している。

第Ⅱ部では、野球放送が事例に取り上げられる。著者は一方で、いかなる性質の「声」が初期の放送で作られつつあったのかを、松内則三と河西三省という２人の代表的アナウンサーの野球中継のスタイルを詳細に比較分析することから示していく（第 6‐8 章）。他方、そのような野球放送は、家庭の団欒においてではなく、街頭で集合的に聴取されるものであったことが、同時代の電力供給・消費の実態から説得的に明らかにされていく（第５章）。

第Ⅲ部では、ラジオ放送の初年度から始まった英語講座に注目し、そこで開発された放送の「声」の性質を考察する。同番組は、言語学者・岡倉由三郎によって制作されたもので、岡倉は語学番組の一講師だけでなく、東京放送局の顧問としてラジオの「声」の設計に深く関わった。著者は、英語講座の内容や岡倉の言語思想を分析し（第 10－11 章）、草創期には放送以前からの「声の文化」を借用していた放送局が、「英語会話」の番組化（第 13－14 章）や「共通語」の開発、アナウンサー学校の新設による声の標準化を通じ、1930 年代半ばには独自の「二次的なオラリティ」の文化を制度化していったことを描き出していく。

以上のように本論文は、放送局と受信機メーカー、アナウンサーと聴取者、娯楽番組と教養番組などの多層的な相互作用を丹念に跡づけ、日本における「放送」の歴史的生成を立体的に描き出している。著者は、雑誌投稿からメーカーの一次資料までを含む関連文献を広く渉猟し、従来のマスコミ史研究の枠を大きく広げ、実証的に厚みのある記述に成功した。理論と実証が適切に結びついた力作であり、本審査委員会は、本論文の学術的意義を高く評価し、全員一致で博士（社会情報学）の学位を授与するに値するものと認定した。